



TITLE:

1. まえがき

AUTHOR(S):

黒河, 宏企

CITATION:

黒河, 宏企. 1. まえがき. 飛騨天文台30年のあゆみ 1998: 1-1

ISSUE DATE:

1998-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/241457>

RIGHT:

1. まえがき

飛騨天文台が北アルプスの山々を一望出来る大空の下に立ち上がり、その活動を開始したのは30年前の昭和43年（1968年）11月のことであります。

京都市の急速な都市化による花山天文台の環境悪化の為、昭和36年頃宮本正太郎先生を中心として新天文台建設計画がスタートしました。昭和38年には第一次候補地調査が実施され、昭和39年には第二次調査観測が行われて、候補地が更に絞られ、昭和40年に当地に決定されました。昭和42年度には険しい山肌を切り拓いて専用道路が建設され、昭和43年11月に管理棟、本館等が竣工し、花山天文台から60cm反射望遠鏡を移転して、飛騨天文台が設立されたものであります。この間の詳しい経緯につきましては、服部昭先生が、天文月報に紹介されております。まさに、多くの方々の並々ならぬエネルギーとご尽力の結晶でありました。

創立当時の1960年代後半から1970年代にかけては、アメリカとソ連が競って宇宙空間探査ロケットを打ち上げ、月及び惑星の研究が脚光を浴びた時代でありました。飛騨天文台も当初惑星天文台と呼ばれたことから判るとおり、花山天文台と共に惑星観測に最も力を注ぎ、昭和47年（1972年）にはレンズの望遠鏡としては東洋一の65cm屈折望遠鏡を設置して、名実共に地上からの惑星観測の拠点となりました。特に、火星表面の長期にわたる精密観測データの蓄積は、その気候変動の研究を行う上で、現在では世界的に貴重なものとして、高い評価を得ております。

昭和54年（1979年）には、長年にわたる太陽グループの夢を実現して、世界第一級の高分解能を持つドームレス太陽望遠鏡が完成し、我が国の太陽観測を一気に世界の最前線に押し上げました。ドームレス太陽望遠鏡は、毎年、全国公募によって他機関の研究者にも広く利用され、次々と世界的な研究成果を挙げて、我が国の地上太陽観測の中心的役割を果たしてきております。又、現在では人工衛星を含めた国際ネットワーク観測のアジアにおける拠点としても、益々重要な役割を担って活躍しております。

平成4年には、太陽エネルギー地球擾乱問題についての国際協同研究（STEP）に参加することによって、太陽フレア監視望遠鏡を新設しました。これによって、太陽フレア及びプロミネンス爆発の観測体制が強化され、太陽地球間環境の研究分野にも積極的な貢献を行えるようになりました。

このように教育研究環境が次第に整備され、主として太陽系天体及び太陽の研究分野において、花山天文台ともども多くの成果を挙げると共に、京都大学理学部及び大学院理学研究科を中心とした大学院生及び学部学生への先端的な教育と研究指導を行ってまいりました。又、青少年や教育関係者をはじめとした多くのグループからの申し込みに応じて、見学や研修の案内を実施し、天文学及び自然科学に対する知識と興味の普及など、一般社会の方々への啓蒙活動にも力を注いでまいりました。

厳しい自然環境の中、過労と病に倒れられたお二人の先生のご無念を決して忘れることは出来ませんが、台員一同力を合わせて、この度の30周年を迎えることが出来ましたのも、ひとえに、京都大学関係者、上宝村関係者をはじめとする多くの皆様方のご支援のおかげであります。ここに、厚くお礼を申し上げます。

この30年を一つの区切りとするとともに、「太陽宇宙磁気プラズマ研究」、「地球環境に影響する太陽活動変動の研究」などの次期プロジェクトへの発展に向けて、決意を新たにすべく、この小冊子を作成致しました。研究成果の紹介に際しましては、スタッフの他、大学院生、研修員、天文台OBの方々にもご協力を戴きました。限られた時間と紙面でまとめましたので、すべてを網羅出来てはおりませんが、ご了承戴きたいと思ひます。又、戴いた原稿をそのまま掲載しましたので、統一的な編集は出来ておりませんが、多様な研究の特徴とそれぞれの心意気をそのままお伝えすることが出来たならば、幸いです。

京都大学大学院理学研究科
附属天文台長 黒河宏企